

『柿の種』と遊ぶ

世木田 寛子

「新しい帽子を買ってうれしがっている人があるかと思うと、また一方では、古いよごれた帽子をかぶってうれしがっている人がある。(大正十年十月、渋柿)」これは寺田寅彦の『柿の種』の一作品である。

最近、ひどくこれが気になる。

私は、この寺田寅彦にこだわりをもちはじめた 40 年くらいになる。そのきっかけは、なにげなく TV のチャンネルを動かしていたときに「茶碗の湯」の作品が取り上げられていたことにある。その頃、私は、中学 2 年生の理科の授業を担当していた。なぜか中四国中学校理科教育大会で公開授業をすることになり、どんな授業をしようかと頭を悩ましていた。寺田寅彦といえば「天災は忘れた頃にやってくる」くらいしか頭になかった。そこにこの「茶碗の湯」という意外性のあるフレーズに目が止まったのである。そうだ！これだ！この「茶碗の湯」を取り入れた授業をやってみようと思いついたのである。

その日があった。理科室を真っ暗にした。朗読の上手な先生に前もって吹き込んでもらっておいたこの作品を流す。「ここに茶碗が一つあります。中には熱い湯がいっぱいはいっております。ただそれだけでは何のおもしろみもなく、不思議もないようですが、よく気をつけて見ていると、だんだんにいろいろの微細なことが目につき、さまざまの疑問が起こってくるはずです。ただ一杯のこの湯でも、自然の現象を観察し研究することの好きな人には、なかなかおもしろい見物です。・・・」

各実験機のピーカーに、熱湯を注いで歩く。そこから出る湯気をしっかりと観察させるというところから始まる。生徒も参加者も興味津津。その気付きを発表させてからおもむろに教卓で湯を一杯入れたやかんを火にかける。やかんの口から出る湯気の観察をさせながら、雲のでき方や湯気の流れから実際に起こっている気象状況の共通点に気付かせる。そんな授業を繰り返した。そして最後に「家庭でもちょっと気にしてみると不思議があったり、なるほどと思うことがあるかもしれないよ。」と、締めくくった。参観者や生徒の反応はともかく私自身は満足したのである。そして理科ってこのように身近なものとなぐと興味を示す生徒が増えるかもしれないと強く思ったのである。

それから私自身、寺田寅彦への関心が強くなってきた。不思議なもので気になりだすと、急に彼の名前が目に付くようになった。

自分が新しいバッグを初めて持ち歩くと、人が持っているバッグが気になるのと似ている感覚である。

書店に行き彼に関する書籍を見て歩いた。結構沢山ある。本人の執筆したもの、関係者が著作したものなど様々である。今買わないとなくなりそうな衝動にかられ、どっと買い

込んだ。その中でもっとも心惹かれたのが、この『柿の種』であった。

『柿の種』

自序のおわりに「この書の読者への著者の願いは、なるべく心の忙しくない、ゆっくりした余裕のある時に、一節ずつ間をおいて読んでもらいたいということである。」(昭和 8 年 6 月) とある。

なるほど、短い作品ばかりなので、持ち歩き、バスを待つときやトイレやゆで卵を作っているときなどに、ぱっと開いたところを読むことにした。なるほど、と思うことが多い。また、細かいことによく気付く人だなあと感心したり、同感することも多く喜びに浸るいい時間が持て始めた。だいたい目がゆきとどいたころ次の読み方を考えた。

それは、始めから一つ一つ読み、その作品に○、◎、?の印をつけていくことである。これを始めると考えながら読むことが多くなった。そんな読み方が一通り終わると今度は?印だけを読みかえし、もう一度しっかり考えて○印に変えたりという方法を試みた。そうすると彼が冒頭に記している「棄てた一粒の柿の種 生えるも生えぬも 甘いも渋いも 畑の土のよしあし」という意味が何となく見えてきた。そして?が○になり◎に変わっていく自分がだんだんと何となく寺田寅彦の世界に入っていくのを感じ嬉しくなった。

ある日、大きな決心をした。

「全作品の書き写しをし、それぞれの感想を記録する。」という作業である。文庫本、287 ページある。黒ペンで本文を書き写し、赤ペンでアンダーライン、表題のないものには自分で付ける。そして、青ペンで感想を書くというルールを作った。手が痛くなる。痺れる、腕が突っ張る。今日はこの辺で終わろうかと思いつつも続けていった。以前に何度も読んでいたものだけに、馴染み深い作品ばかりなので意外とすんなりと進む。しかしその中にまた新しい発見もある。また不思議なことに感想を書く私の語調が彼のリズムと似てきているのが面白い。その上、それぞれの作品の裏の思考も見え出した。毎日毎日続けていくとその記録用紙の厚さが 5 cm 位までになった。そしてこの仕事が終わった。その時の達成感は何ともいえないものであった。やり切ったという安堵感に浸りそれから当分、『柿の種』から距離を置いた。

年譜づくり

『三代紀年表』という本を求めた。1850 年から現代までが一年一ページに歴史的出来事(事件、災害、政治、出版物、芸能、流行、流行歌、流行語その他)が記されていて見聞きの片面は白紙になったものである。その白紙のページに寺田寅彦の年譜を記入していく作業をしはじめた。

家族構成、出版物なども調べ記入していく。それに私にまつわるルーツ、背景も付け加えていった。日頃関心をもっている夏目漱石、宮沢賢治、柳田国男の足跡も付記した。左

ページに時代背景があるので、それらの関わり合いが浮き上がってくる。

この作業は、何かと重宝するものとなった。

久々に『柿の種』を手にした。

そして「新しい帽子を買ってうれしがっている人があるかと思うと、また一方では、古いよごれた帽子をかぶってうれしがっている人がいる。」に凝視してみた。

まず始めに「古いよごれた帽子をかぶってうれしがっている人がいる」に集中した。60数年前の私、中学1年生、その時の紙ばさみが今でも手元にある。当時は色も好き、使い勝手も抜群、父と散歩しているときに買ってもらったものである。今では、角は厚紙がむき出しになり、色もあせている。B5版なので最近では何かと使い勝手はよくない。その頃書いたであろう自分の名前がうっすら見える。思い出多いものをそばに置いていることに喜びを感じているのだ。だからよれよれになった帽子を被って嬉しがっている人の気持ちもよく分かる。と、この段階ではこの作品の表面を自分の体験に合わせて何となく理解し共感していた。

次の瞬間、あの寺田寅彦がそのくらいのことを随筆として書き残すだろうかと思い始めた。そんな薄いものじゃないだろう。

そこで、あの年譜と見比べながら考えを進めていった。彼は明治11年戊寅生まれ。だから寅彦。熊本での高校時代に夏目漱石との出会いから俳句の世界に興味をもち始める。本業は地球物理学、実験物理学である。地球物理学は現代とは違い測地、地震、気象、地磁気、海洋、火山・・・と広範囲の地球を物理的に研究する幅広い領域である。また、実験物理学はそれらを文字通り実験し検証していく学問である。それだけに検証されたときの達成感はひとしおではなかろうか。彼のエピソードにガラスの割れ方が気になりだしたら何十回、何百回いや何千回もガラスを割り続けて結論を導き出したというのがある。

また、相対性理論や音響、量子論などにも多大な関心があり、ニュートンやアインシュタインと同じ世界を歩み始めている。彼は研究に対してとことんやっつけていかないと気がすまない性格である。そのため無理をし、自分の体調を崩すことは度々であった。24才の頃は妻夏子の死、漱石のイギリス留学、正岡子規の他界などが重なり大学時代は心安まることはなかったようである。

しかし次の年、東大大学院生となり歴然とした仕事ももらうようになった。漱石も帰国し元気が出てきた。明治37年(1904年)には講師となり、そのまた次の年には再婚した。アインシュタインが特殊相対性理論を発表、それを研究したり、漱石の家に度々出入りをしたりと花開く人生が始まった。再婚相手の寛子(ゆたこ)が奏でる琴に合わせ尺八を志す。そしてその尺八に関しての音響学的研究で理学博士を勝ち取ることができたのである。それから2年間かけてドイツに留学し、イギリス、北欧、ロシア等を旅行する。東大の助教授になる。このあたりが古典物理学を志すものとしての寅彦は頂点だったようだ。

帰国して結晶によるX線回折の実験に没頭する。研究成果をイギリスの学術誌に論文として投稿した。しかしその論文が届くより先にイギリスの科学者ブラッグ父子の論文が発

表され、彼等がノーベル賞を受賞するに至ったのである。後からそれを知らされたときの寅彦のショックは相当なものだったようだ。大正4年(1915年)のことである。その時のことを米沢富美子は「遠く離れた日本において、欧米の研究者と同じテーマを対等に追うのは事実上不可能であった。」(「才能を活かしきった人—寺田寅彦のあれこれ」『寺田寅彦いまを照らす科学者のことば』池内了責任編集 河出書房新社 p105)と述べている。そうして、彼の研究の内容に変化が見られるようになった。いわゆる古典物理学と言われる研究の分野から離れ、彼独特のものが形成されていくのである。漱石の死、妻寛子の死と不幸が重なり寅彦の身体も下り坂にかかってきた。そして大学で吐血し2年間の休職となった。この時期にあの「帽子の作品」が書かれている。仕事から離れ、幸か不幸か、ゆったりと東京を散歩する時間が持てたのだろう。その時間の使い方は彼の彼らしきものとなっている。あのノーベル賞事件からある部分について手を引いたが、かの文才を武器に科学の視点をフルに活用した随筆活動に磨きをかけてきているように思える。

そんな中、アインシュタインが来日し、彼が歓迎会でヴァイオリン演奏をした。(『寺田寅彦バイオリンを弾く物理学者』末延芳晴著 平凡社 p235) それを目の当たりにし、世界の第一線の物理学者が柔らかい音色をかもしだすことに感銘をしたらしい。自分もヴァイオリンの世界に足を踏み込んでいる。堅い物理一筋でない生き方の自分を肯定した瞬間であろう。

「西洋の学者の掘り散らかした跡へはるばる遅ればせに鉱石のかけらを探しに行くもいいがわれわれの足元に埋もれている宝も忘れてはならないと思う。(備忘録)」と記している。まさに「備忘録」である。自分に何度も何度も言い聞かせる為のもののように思えて痛々しい。あの私が魅せられた「茶碗の湯」もこの頃の作品であることに合点がいく。また、「新しい帽子を買ってうれしがっている人があるかと思うと、また一方では、古いよごれた帽子をかぶってうれしがっている人がある。(大正10年10月、渋柿)」から強烈な彼の決心が伝わってきた。新しい帽子を被ったのはブラッグであり、古い帽子を被った自分、たった2行の作品にも物凄い重みがあると感じた。

彼の口癖の「ねえ君 不思議だと思いませんか」のキーワードで第二の寺田人生を根付かせているように思う。

1923(大正12)年関東大震災が起こる。それから後も次々と天災がやってくる。これらについて警鐘を鳴らしてくれる科学者がどのくらいいるだろうか。神秘の世界の研究も必要だろうが、足元をしっかりと理解する、解明する力があってこそ科学のすばらしさに共感し魅力が継続できるのではなかろうか。考えようによっては、地震国日本において彼があの時ノーベル賞を逃してしまったことは、結果的には有り難かったことかも知れない。

これだけのことを古い帽子と新しい帽子を使って教えてくれる『柿の種』に脱帽した。柿の種を大切にしたい。